

日本における中医鍼灸の実践

金子朝彦^{*1}

^{*1}三旗塾

中医鍼灸の特徴は弁証論治と穴性論を全面に押し出した点にあると考えている。この2点を踏襲すれば、和鍼を使おうが、灸のみで勝負しようが中医鍼灸の枠内であることには変わりはない。後は地域の異なりやその地の人の気質・体質の違いが、治療道具や技法に反映するを考える。

学生時代より補瀉は刺激量にあらず技法の違いにより成立すると考え、開業後3年間は寸3-0番鍼のみ使用した。無謀にも穴性を導く技法を寸3-0番鍼のみに託したのである。

そのうちひとつの疑問が沸き上がる。自分が使う日本独特の極小の鍼（0番）と中国針（30番程度）とは果たして同じ補瀉論が成り立つか？である。同じネコ科とはいえ猫と虎ぐらいの違いがあるものを同じ土俵に載せることに無理があるのでないか？と考える。

現行の補瀉論は古来より継承・発展したものであり、歴史の中で洗練されたものであろう。局面ごとの補瀉も包括するゆえ多数の補瀉論が併存する。

しかし極小の鍼を使ってのものではないことは確かだ。この極小の鍼が歴史の表舞台に登場してまだ日が浅い。道具の違いが補瀉論の表現の違いとなって表れてもおかしくはないのではないかだろうか。以前、アメリカの数人の鍼灸師から何故日本の鍼はそんなにも細いのかと詰問されたことがある。“文化”と答え、納得してもらったことを思い出す。

また道具の違いが経絡の浅深を規定することもある。得氣のあるところに経絡ありと考えればそうとしか考えられない。

これを確信したのがフィリピンの無医村での体験である。よく体を動かす人たちは総じて経脈が深く、比べて座位での仕事をする人たちは経脈が浅い。かの地でいつも程度の深さでは得氣を導くことができないという体験をし、この意を強くする。

さらに道具の違いが『つぼは動く』という意識を導く。極小の鍼は刺激量が圧倒的に小さい。そこでより詳細につぼを探すという意識が生まれてくる。まさしく『今のつぼ』を探さなければならない。

中国では教条主義的に鍼を打つ、と非難する方が少なからずいる。だが、これは非難するに当たらない。ドーゼが強いと同然に教条主義的取穴でも『今日のつぼ』を網羅してしまうからである。

ここまでくると文化の違いを感じてしまうのは私だけだろうか。

我が国の先人達は道具を手の中に入るくらい小さくし、縦横無尽に操ることで匠になることを求めた。中庸の一点、つまり補瀉の到達点はピタッとはまらなければならいと考えたのだろう。

教条主義的でかつドーゼが強ければ中庸の一点も、行き過ぎれば戻せば良いと考えても不思議ではない、つまり振り子の論理が成立する。

伝統鍼灸（中医鍼灸）は地域、人あるいは文化背景の違いを、ことのほか丁寧に扱わなければならないものと考える。グローバリズム的な近代医学との決定的な違いでもある。

このような経過の中で私は補瀉の定義を得氣の表れ方に置くようになった。得氣の流れ方や速さなどが決め手になる。またサブ的に鍼先の実体的变化を補瀉とリンクさせることもある。活血化瘀の近部取穴の際などに用いることが多い。